TOKYO GLOBAL 10

GLOBAL JOURNAL

VOL. 6
6.8. 2018

５月１８日（金）　国連職員　加藤 美和　氏　講演会　大盛況のうちに終わる！

5 月 18 日（金）、本校大会議室にて、国連職員 加藤美和氏講演会」が開催されました。参加者数は 150 名を超え、予想をはるかに上回るものでした。ここ数年で最も参加者の多い講演会となりました。しばらくの間は破られることのない記録になるかもしれません。

当日に帰国されたという加藤氏。世界を飛び回り、いかに忙しい毎日を送っていらっしゃるかがわかります。所属機関でもかなり高いポジションで働かれていますが、とても気さくな方で、講演内容についても日比谷生のためにとても丁寧に考えていただきました。シンポジウムや大学での講演はこれまで数多くされていましたが、高校での講演会は初めてだったそうです。そういった意味でも大変貴重な機会であったわけです。

講演は、大きく三部構成で行われました。国連機関の体制、そして加藤氏の職務について、現在国連職員として働き、感じる諸問題について、そして質疑応答です。

一つ目の国連機関の体制については、ホワイトボードを活用して説明してくださいました。複雑な国連機関の構成や役割について詳しく教えてくださいました。国連の仕事というと世界的で大きなイメージがありますが、国連職員の方々も日々の職務に悩んだり挫折感を味わったり、あるいは小さな成果に達成感を感じたりと日々地道にお仕事をされているというお話をいただきました。次に、加藤氏が現在感じていることについては、本当にどれも印象深いことばかりでしたが、いくつかに絞ってお伝えしたいと思います。

1 個人の意思表明が以前より可能に

加藤氏が以前の世界の状況と現在を比べて、大きく変わったと感じられている点は、世界の人々が意思表明できるツールが格段に発達したことだそうです。SNS に代表されるように、個人の思いを世界に発信できる手段が広がってきているのです。さまざまな人の知識やビジョンが世界に、そして国連にいろいろな形で影響できる時代になったということです。

世界にはこれまでつながりのなかったところにもつながりができ始めていて、そういった状況においては、これまでにはない新たな発想が求められている、ということもお話されていました。

2 ジェンダーの問題は多様性を尊重する問題

加藤氏は、ジェンダーの問題というとどうしても男女平等というような話になってしまう傾向があるが、それだけではなく性別を超えた部分での平等のことを言っているそうだ。性別を含む多様性の尊重ということである。加藤氏の言葉では、「すべての人がポテンシャルを発揮できる社会」の実現が目標ということである。そうすることによって社会が活性化し、ひいては経済的な成長にもつながっていく、とのことだ。

日本はこの点、特にジェンダー平等については世界にかなり遅れをとっているそうだ。女性の政治参加や企業の女性管理職の数など、ここまで日本ではこの問題の改善が進んでおらず、これだけの経済発展を実現しているのはむしろ稀有なケースだそうである。

3 多様性を尊重するとは

加藤氏のお話の中で、氏が御結婚されてお子さまができてからは、しばらく安定した仕事環境を続けていたが、ある時点で現状のままでよいのか、という問いかけを自らにしたそうだ。「世界にはまだまだ目を向けなければならない問題がある。自分はもっとさまざまなところに行って、さらに多くの人々と出会う必要がある。」という結論を出し、当時の仕事から現在の仕事に変わったそうである。

加藤氏からは、「自らに多様性がなくては、世界の多様性を理解するのは難しい」という言葉があっ

た。まさに氏の信念とも思われるものである。「これからの世界のニーズを満たしていくためには、いろんな人の視点を取り入れることが重要になってくる。」常に成長を求め自らを磨くことを、他者の理解につなげていこうという姿勢が、まさにグローバル人材としての資質の一つではないだろうか。

この他にも、心を打たれるさまざまなお話がありました。質疑応答でも、生徒からの硬軟の質問に気さくに答えてくださいました。終了の時間が来ても質問が途切れず、帰り道の正門までの道すがらにも日比谷生が質問を続け、最後まで真摯に答えてくださいました。

今回の講演会は日比谷生にとって大きなものとなったと思います。この講演の実現に支援してくださったみなさんに感謝して、今後の糧としていきましょう。

６月１日（金） Ethan Raker 氏 講演会　～ハーバード大学博士課程生による講演会～

Sociology: Research on the Impact of Environmental Changes and Climate Change on certain Populations in the U. S.

ハーバード大学博士課程に在籍する新進気鋭の社会学者、Ethan Raker 氏の講演が本校で行われました。参加人数の上限まで多くの生徒が参加しました。考査前でもこういった講演会に参加する日比谷生の知的好奇心の高さは素晴らしいものだと思います。

Raker 氏はハーバード大学で社会学の授業を担当され、学生に講義を行っていますので、本講演はまるで「ハーバード大学の模擬授業」のような感覚もありました。実際に、講演は講義形式だけではなく、時々グループ・ディスカッションを求めるもので、その後互いのグループの意見をシェアするという流れでした。（１，２年生のコミュ英の授業形式ですね）「日本での災害とそれが社会に与えた影響」といった最初の質問の投げかけから、トピックは多岐に渡りました。

データ分析において活用される「entropy」の話については、なかなか理解が難しかったかもしれません。いくつかの数式も登場し、今後自分たちでいろいろと調べてみるとよいでしょう。

「アメリカの国勢調査」などさまざまなお話が興味深かったのですが、印象的だったのは、アメリカの災害に対する国としての対応です。アメリカは共和制ですので地方自治性が高いのは理解できます。では一地方都市で大災害が起こった場合どうなるのか？氏のお話では、なかなか国家的な対応、つまり連邦政府が迅速に対応することは難しい、ということなのです。大統領と州の首長との関係性にもよる！との話がありました。つまり州政府と連邦政府との災害における速やかな連携は、アメリカの課題でもあるそうです。他にも紹介したいさまざまな興味深い内容がありました。

とても印象に残った場面があります。それは Raker 氏がディスカッションをみなさんに求めた時、とても自然にグループを作り、英語でディスカッションを行っていたことです。また、学年が違ったり、クラスが違っても、スムーズに意見交換ができたのは、授業でこの形式に慣れているからでしょう。一歩ずつですが、授業での取組の成果というのは表れるものです。

この講演は本校 JET、Emma Riley 先生の尽力によるところが大きいものでした。今後も、こういった外国の大学で教鞭をとられている先生方の授業を受ける機会を提供できたらと考えています。